

フェローシップ・ニュース

41

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 今後の予定

< 第3回現地派遣 フィリピン・マニラ >

第3回目の派遣は7月11日～17日まで、日本人メンバー3名がマニラに渡り、活動を行ってきます。派遣予定者は三浦陽二、山本大、古藤吾郎の3名で、今年の1月に行われた第2回派遣と同じメンバーです。

派遣期間:2010/7/11(日)～7/17(土)7日間

活動内容:8月に本邦研修に来る予定のフィリピン人コアメンバー2名と交流を深める。現在タタロン地区で開かれているARMミーティングに参加し、開催状況を確認する。コアメンバーたちと振り返りと分かち合いを行う。今後の展開について協議する。

< 第2回本邦研修 東京・藤岡・京都 >

昨年は3名のコアメンバーが本邦研修に参加しましたが、今年は新しく選ばれたコアメンバー男女2名が参加します。

研修2日目にはダルク25周年フォーラムに参加します。4日目からは横浜で開かれるNAコンベンションに参加し、世界中から集まるNAメンバーと交流を図ります。メイン研修会場となる日本ダルク アウェイクニングハウス(藤岡)では、原井宏明医師による「モチベーション・インタビューング」など多様なワークショップを企画中です。又、最後の3日間は、龍谷大学矯正・保護総合センターにご協力いただき、京都・奈良研修を企画することになりました。

今回の研修にご協力いただく龍谷大学、各ダルクの皆さまには、この場をお借りし御礼申し上げます。

研修期間:2010/8/17(火)～8/28(土)12日間

参加予定者:キンバート氏、キャロル氏、リッチー氏(ファミリーウエルネスセンター代表)の計3名

目的:ダルクでの共同生活を通じて、ダルクプログラムに参加し、誰にでも平等に回復のチャンスがあり、どのような状況下であっても回復プログラムを受けることができるということを学ぶ。12ステップやミーティングの有効性と実施方法について学ぶ。日本の薬物依存事情と治療について学ぶ。

スケジュール(予定)

	日付	午前	午後	滞在先
1	8/17(火)		13:30成田空港到着 夕方:オリエンテーション	上野(日本ダルク)
2	8/18(水)	ダルク25周年フォーラムに参加		上野(日本ダルク)
3	8/19(木)	日本ダルク見学、JICA訪問、フィリピン大使館訪問	APARIにてビジネスミーティング	上野(日本ダルク)
4	8/20(金)	NAコンベンション(横浜)		上野(日本ダルク)
5	8/21(土)	NAコンベンション(横浜)		上野(日本ダルク)
6	8/22(日)	NAコンベンション(横浜)	フリー	上野(日本ダルク)
7	8/23(月)	東京 藤岡へ移動	フリー	藤岡(日本ダルクアウェイクニングハウス)
8	8/24(火)	ワークショップ(藤岡)		藤岡(日本ダルクアウェイクニングハウス)
9	8/25(水)	ワークショップ(藤岡)		藤岡(日本ダルクアウェイクニングハウス)
10	8/26(木)	藤岡 東京 京都へ移動	京都ダルク見学	京都(龍谷大学ともいき荘)
11	8/27(金)	ワークショップ(龍谷大学)	ワークショップ(奈良ダルク)	京都(龍谷大学ともいき荘)
12	8/28(土)	フリー	14:20伊丹空港発 15:35 成田着 夕方マニラへ	

特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

発行日
2010年7月1日

APARIとは、アジア太平洋地域アディクション研究所(Asia-Pacific Addiction Research Institute)の略称です。

全国のDARCやMACの各施設、福祉・教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする方々を支援しているシンクタンクです。

目次:

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 25周年フォーラム案内	1
ダルクとHIV～HIV感染者とともに暮らすこと…古藤吾郎	2
刑務所講演より「依存症と犯罪」(後編)…町田政明	4
「バーンアウト」(後編)…三浦陽二	5
入寮者からのメッセージ…ノボル	6
藤岡ニュース!	7
APARIからのお知らせ	8

ダルク25周年記念フォーラム 開催!

「ダルクの流儀 - 回復の権利 The Right Of Recovery」

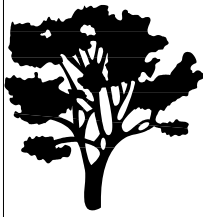
2010年8月18日(水)10時～17時半

場所:浅草公会堂(東京都台東区浅草1-38-6) 参加費:無料 申し込み:不要

< 懇親会 > 18時半～20時半 浅草ビューホテル(東京都台東区西浅草3-17-1) 会費:5千円

懇親会のお申し込みは、日本ダルク・インフォメーションセンター(03-3844-4777)へ。

詳しくは同封のチラシをご覧ください。



ダルクとHIV～HIV感染者とともに暮らすこと

ソーシャルワーカー 古藤吾郎

全米ドラッグ・コート
第16回トレーニング
カンファレンスに
参加して

2010年6月2日(水)～5(土)
ボストン
報告：尾田真言

次号フェローシップ・
ニュースにて掲載する
予定です！
どうぞお楽しみに！！

当たり前のことかもしれませんが、HIVに感染している人は世界中にいますし、日本国内でも全国各地の地域社会で暮らしています。ですので、どこかの地域のとあるダルクにHIVに感染している人が数年ほど入寮するということがあってもとくに不思議なことではないでしょう。入寮者のなかには感染していることをオープンにしている人もいます。その一方で、オープンにしていた人がいないから感染者はいなかった、ということでもないかもしれません。これまでにダルクに一度でも入寮したことがある人のなかで、HIVに感染していることを自ら知っていた人たちもいたのですが、感染しているけれど本人は知らない、という人もいたのではないかと思うからです。自分自身の感染に気づいていないことはダルクに限ったことではなく、日本社会全体にあてはまるのです。

国内でHIVの感染が確認されている人は2万人に及びません。しかしながら、その人たち以外は感染していないということではありません。身体内にHIVが有るかどうかが、だけではなく、“無いのかどうか”も検査しなければ判定できません。そして、受検して現時点での感染の有無が確実にわかっている人は国内人口の数パーセントに過ぎないと言われています。つまり、私たちが日々出会う人のほとんどは、厳密に言うと、自分自身がHIVに感染しているかどうか知らない人たち、なのです。そして、そういう人たちから構成される社会のなかで暮らしていても、限られた行為でしか感染は広がらない、ということなのです。

HIVの基本情報

HIVとは人間の免疫力にダメージを与えるウィルスの名前で、そのウィルスに感染して何も治療をせずにいると、数年から十数年後にエイズという病気を発症することになります。HIVというウィルスは、空気中に、水のなかに、さらには動物や虫など人間以外の生物のなかには存在せず、人間の体のなかに存在します。がんのようにあるとき身体内に発生するというものではなく、C型肝炎と同じように他者が持つウィルスに感染するのです。

HIVが含まれる血液、ちつ分泌液、精液、母乳が、体の粘膜と呼ばれる部分（目、口、ちつ、尿道口、肛門など）や傷口に接触すると、感染する可能性があります。つまり、日々の暮らしのなかでHIVに感染するような機会というのは、特定の性行為と注射針の共有くらいになるのです。

また、HIVに感染しているかどうかを知るには血液を検査します。この検査は全国の保健所で無料・匿名で受けられます。感染している場合、ウィルス量等に応じて服薬治療を受けられます。適切な服薬治療を続ける限り、ウィルスを限りなくゼロに近づけることが可能です。

ダルク入寮者とHIV検査

ダルク入寮中の人HIV検査を受けるとすれば、検査を受ける本人が自分自身の健康を知ることが目的となるはずですが、薬物依存からの回復が“自分自身のため”であるのと同様に、この検査も自分自身のために受けるわけですから、本人が自主的に検査を受けたいと望み、その結果は本人のみに知らされ、その結果を他者に伝えるかどうか、伝えるなら誰に伝えるかをその本人が選択できるというような環境が望ましいのでしょうか。

スタッフへの告知

ダルクで生活するなかで、自分自身がHIVに感染していることを知った場合、スタッフにそのことを伝えずにいるということは現実的に難しいかもしれません。なぜならば、感染者は体内のウィルス量などをチェックするために定期的な医療受診が必須となるからです。医療は全国にあるエイズ診療拠点病院と呼ばれるところで受診することができます。入寮中にはじめて感染を知った場合も、あるいはすでに感染を知っていてダルクに入寮することになった場合でも、地域の拠点病院での受診が可能です。とはいえ、週末に受診できる医療機関は東京や大阪に一部あるだけのようですので、ほとんどの場合、平日に受診することになります。そのため、少なくともスタッフに事情を説明することは避けられないのではないかと想像します。

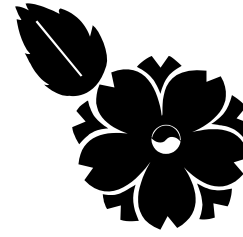
HIV感染者のダルクでの生活

HIVに感染していてもダルクに入寮することに支障はないと思われます。拠点病院での受診の頻度は、健康状態によりますが、落ち着いていれば2～3ヶ月に一度となります。



感染が判明してすぐのときや、服薬治療がはじまるときなど、状況によっては入院や一時的に頻繁な通院が必要となる場合もあるでしょう。また、治療薬を服薬している場合でも、プログラムへの参加が困難になるほどの副作用が長期的に続くということは考えにくいようです。

もし病状の変化によりダルクでの生活が適当ではないということになったとしても、そうした判断や対応はダルク側ではなくエイズの診療を担う医療機関が主体となって進めることになるでしょう。そして、ダルクでの回復プログラムへの参加も含め生活状況等を医療側に理解してもらうために、ダルクと医療機関の連携が重要になると思います。



他の入寮者への告知

感染を知っている本人、またはそれを知ったスタッフは、他の入寮者に対して告知することについて、悩むことがあるのかもしれませんが。あるダルクの方から、“クスリを使う自由と、使わない自由がある”というような内容の言葉を聞いたことがあります。とても素敵な表現だと思っているので、それにならって表してみますと、ダルクに入寮しているHIV感染者は、いかなる理由であれ、他者にそのことを告知する自由と告知しない自由があると思います。自ら感染していることを告知する人がいるからといって、誰もが必ずそうしなければいけないということではなく、告知したくない人の気持ちというのも尊重されるべきものだと考えます。

告知することで他の入寮者やスタッフがHIVへの理解を深めるきっかけになるというポジティブな側面もあるかもしれませんが。本人が告知することを選んだ場合はそうした副産物が得られることあるのですが、しかしながら、感染している本人が他の人には知られたくないと思うならば、その個人的な心情は、他の入寮者やスタッフのための“教材”としての役割を果たすことより尊重されるべきでしょう。

ダルクスタッフの理解

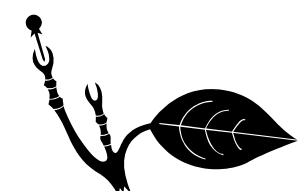
HIVに感染している人がダルクに暮らすとき、医療受診や医療との連携を考えるとスタッフに告知しないことは現実的に難しそうです。そこで、スタッフが告知を受けたとき、感染者である仲間の健康や回復のことよりも、他のスタッフや入寮者への感染に対する心配や不安を抱くことがあるかもしれません。なかには“嫌悪感”を抱く人もいるかもしれません。さきほどの表現を再度使い回してみますと、他人に対して好意を感じる自由もあれば、嫌悪する自由もあります。ただし嫌悪感から他人を排除・攻撃しようとすることはあってはならないはず。その不安・心配あるいは嫌悪は、HIV・エイズのことをよくわからないところから生じているのかもしれませんが。

日常的なHIVの感染経路は特定の性行為か注射針の共有なので、入寮者同士でそのようなことがなければ、ダルクで共同生活をして感染しないことは明らかです。さらに、これまでにダルクで仲間として出会ってきた人たちは感染していなかったのではなく、感染しているかどうか知らなかった、だけれどいっしょに暮らしてきた、という事実があるわけですので、他人の感染の有無を知っていなければ一緒に暮らしていけないという正当な理由はないような気がします。

一方で、薬物依存とHIV感染の両方を抱える当事者にとっては、ダルクで薬物依存回復のプログラムに参加する機会が得られることはなによりだと思います。受け入れるダルクのスタッフにとっては、自分自身の持つ不安や心配に加え、感染者本人そして他の入寮者からの相談、さらには拠点病院との連携なども求められることになるかもしれず、困惑するのではないかと想像します。

専門機関との連携

ダルクは薬物依存の回復支援施設として地域社会で貴重な役割を果たしています。ですので、なにもHIV・エイズの専門施設となる必要はありません。それはまた別の専門機関に委ねればよいのではないのでしょうか。例えば、薬物依存に加えて他の精神疾患を抱えている入寮者が地域の精神科医療を受診しているように、HIV・エイズであれば、その分野の専門機関のサポートを受けることができます。アパリではこれまでにいくつかのダルクでスタッフや入寮者のためにC型肝炎とHIV・エイズに関するケアと予防についてのワークショップを開催してきました。このワークショップや個別の相談などアパリが直接サポートできるものもあります。あるいは、地域の拠点病院、保健所やNGOにはソーシャルワーカーやカウンセラーなどがいますので、感染者と共同生活するスタッフが相談することも可能です。そうした機関と連携するためのコーディネートも喜んでお手伝いいたします。なにかあればどうか遠慮なくご相談いただければと思っています。



ターニング・ポイント



受刑経験のある
ダルクスタッフによる
最新の体験談
12名の体験談と漫画
体験記が載っています

1,000円

ご希望の方は住所、名前、電話番号をご記入の上お申込下さい。
FAX: 03-5830-1791
E-mail: info@apari.jp

刑務所講演より「依存症と犯罪」 後編

ホープヒル 町田 政明

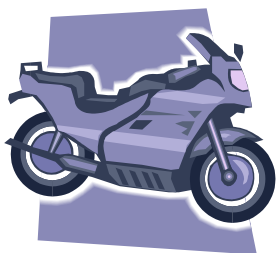
町田氏の原稿は、某刑務所での講演をテープ起こしし、要約したものです。

家族の体験記 好評販売中！

『ギャンブル依存症に悩む
家族の物語
～絶望から希望へ～』

この本には、ギャンブル依存症で悩む8人の家族の体験が綴られています。これは真実の物語です。家族の貴重な体験を知ることができる貴重な一冊です。

定価：1,000円
発行：ホープヒル
(アパリで販売中)



自分の人生をやり直し出来るのは自分でしかないんです。ギャンブル依存症の人もそうです。クリエイターと私は言うのですが、自分の人生は自分で作っていくしかないのです。人に求めてももらえない。立派な家や立派な車はもらえないかもしれないけど、それだけが幸せじゃないのです。ぜひ物の見方考え方の点では、私はないと欲しくなるのはすごく分かるんです。私も実はそういう生き方をずっとしてきました。

私は特にオートバイにはまっていて、スピード違反で捕まってしまいました。危ないスピード狂です。こういった講演をする立場じゃなくて、逆に聞いている方だったかもしれない。中途半端なスピードじゃなくて、スピード依存症、バイク依存症なのかもしれないです。何故バイクかっていうと、やはりイタリアやドイツなどのカッコいいバイクに憧れるわけなんです。何を結局求めたかという、人にかっこいいと思われたい、すごいね、君はすごいよ、かっこいいじゃんって言われたい。そんな感じでずっと生きてきた感じがするのです。認められたいって。でもそういうバイクですごいと言われても、結局本当に自分がそのバイクに乗りたいのかって昨年よく考えたのです。そうしたら自分に合うバイクって違うなって思ったのです。かっこいい最新鋭の速いバイク、自分が求めてたのはそうじゃないなって思ったんです。乗って楽しいバイク。それって何かなって思ったら、実は10年位前の古いバイクなんです。自動車やバイク好きな人だったらわかるかもしれないのですが、今の最新鋭のバイクはとても速くて300キロ位出るのです。あの後ろから押される加速感ってのはたまらないです。町の中で走るようなものじゃないのです。あれを売ったらいけないと私は思うのです。すごい性能なんです。そんなバイクに乗りたいんじゃないって、振動や音を楽しみながらバイクと一体となって走りたい。それだったら、10年くらい前のバイクが自分にはぴったりだって気がしました。

安い中古を買って今楽しんでいるところです。やっとこの歳になってわかりました。実は私はもう57なんです、スピード狂の方はどうしようかなと思っていたのですが、サーキットで走ることにしたのです。速いバイクじゃなくていいから今は10年前のバイクでサーキットを走っている。要するにめいっぱい楽しみたいわけなんです。そういう形で自分はやっとこの歳になって、自分にとって何が楽しみなのか、何が幸せなのかってことにやっと気が付いた。今まで物質的なもの、皆からすごいなっていう、こう見てもらいたいとばかり考えていた。いつ死ぬか分からないこの人生、自分が生きていて良かったなって思えるような人生を過ごしたいと思っています。無理に人の顔をうかがうような生き方はしたくないのです。人の顔をうかがって生きると、自分の人生を振り回されてしまいます。自分で本当に何をしたいのかということを考えていただきたい。自分がどうしたら楽しめるのか、自分の人生は自分一人でしかないんです。皆さん、社会と調和して共存していきたいんじゃないかな。ほんとの心の奥のほうでは。物質的な表面的な何か欲しいとか欲望だけじゃなくて、ほんとの奥のほうの自分の生命の奥にあるモノに聞いていただきたいです。ギャンブル依存症の人もそうなんです。彼等はギャンブルに取り付かれて、自己中で自分がギャンブルさえ出来れば家庭を捨てて、ギャンブルが一番という生活をしてきたわけです。振り返ってみたらそんな生活はしたくないはずなんです。本当は家族とも上手くやりたかったし、仕事も辞めないで、犯罪も犯さないで、皆と上手くやりたかったはずなんです。とりつかれたおかげで、自分の生活がどうにもならなくなってしまふのです。

ギャンブルだけじゃなくて、こうあらねばならない、こうしなければならんって、とりつかれるのも気をつけて欲しいです。ギャンブル依存症の回復は、固い頭を柔らかくする、柔軟性や臨機応変を覚える事です。「それは常識だ」って思っていた事を疑ってみる事です。夫だったら、親だったらという思い込みを捨てるとすごく楽に生きられるのです。ギャンブル依存症の人って、結構いい人が多いんです。犯罪を犯していい人ってのはないだろと思うかもしれませんが、人の顔色ばかりうかがって生きてるから、自分が何をしたいかとか、自分の感情が分からなくなっているのです。それでこうあらねばならないという考えにとりつかれて、自分を苦しめているわけです。それで無理にいい夫、いい父、いい人を演じているのです。彼等は感情をなくして、いい人を演じるためにギャンブルが必要だった。ギャンブルがそのはけ口で、天秤のように両方でバランスが取れているのです。

ギャンブルだけ取るとバランスが崩れます。いい人だけ出来なくなってしまふ。そうすると、実は良い人は何も無いのですね。中身がからっぽなのです。自分がどう生きたらいいのかが分からない。そういう感情の部分が抜けてるんです。自分がどう生きたいのかってのを大事にしなさいって言っています。本当は人と調和を持って生きたかったはず。感情と言えはやはり共感力。人を思いやれるということなんです。

怒りや恨みというのは他人に対する感情ですが、そうではないのです。自分のどこが間違っていたかということについていつも考えること。自分以外の力を使うことです。わからないときは先輩や人に聞く。私たちは「ハイパーパワー」と言うのですが、自分より偉大な力に聞いてみる。そういうものに委ねてみることです。

昔よく私たちは「お天道様は見てるよ」とか「悪いことするとおまわりさんがくるよ」とか言われ、そんなことを信じていたんです。そういう自分以外の力を信じて生きると楽なのです。自分が自分がと言っている間は依存症の病気は止まらないのです。もう少し自分の内側を見るということです。

自分の感情を大事にする、物の見方、考え方、生き方を変えていくことがギャンブル依存症からの回復です。回復とは共感力というものが非常に大事になってきます。この病気は進行する病気なので、この塀を出たらまた戻ってくる病気です。この塀を出たときから治療を始めないと忘れる病気なのです。自分は病気じゃないと思う病気ですから、必ずまたやります。もしそのことに気が付いたら、近くの精神保健福祉センターなどに相談してみるか、依存症の専門機関に相談してみる、あるいは私のところに電話していただいても構いません。やっぱり人の力を借りる。そして自分の生き方を変えていく。自分はどう生きたいか。人のことじゃなくて自分の人生を新しく作っていくこと。これがギャンブル依存症からの回復であり、また皆さんの回復とも繋がるのではないかと思います。

DARS 第3回薬物依存症者回復支援セミナー より 2010/2/21 「バーンアウト」後編

沖縄ダルク 三浦 陽二

私の欠点の一つに「計画を立て、計画どろりにいかない」というものがある。そして、だいたい上手くないのだ。NAの第一ステップでは「我々は薬物依存症に対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなった。」の部分がナラノン（薬物依存症の家族や友人の自助グループ）では、「我々は依存症者に対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなった」となっている。家族や友人はその依存症になってしまった身内を何とかして変えたいと思っているいろいろな方法を探し、試す。しかし周りがどのように思っているか、本人が自分で問題意識（病識）をもって、自分が解決（回復）を望まなければ徒労におわるのである。多くの自助グループで唱えられる小さな祈り『平安の祈り』¹にある「自分に変えられないものを受け入れる落ち着き」の変えられないものとは過去と他人、「変えられるものは変えていく勇気を」の変えられるものとは自分と未来（細かくいうと、過去の結果としての今は変えられないが未来の原因としての今は変えられる）と私は理解している。人を変えることが出来るのならダルクの仕事は簡単なのである。しかし、その変えたいと思う人が自分で変わりたいと思った時に一緒に歩き、ほんの少しお手伝いが出来るくらいしかダルクにも出来ないのである。これを忘れ、高慢にも私（達）のおかげでなどと思うとバーンアウトは近いのである。ダルク職員に伝わる（少なくとも私には伝わった）一つの燃え付きない為のテクニックがある。それは「ダルクを円満退寮していく仲間がいてもあまり喜ばない」といういい伝えである。寝起きを共にした仲間が円満退寮するときはなんとも嬉しいものである。しかし、ダルクを出てからが第一歩なのである。またリラプスして戻ってくる仲間も少なくないのである。そんな時喜んだ分だけ...「良くなってもお前のおかげではないし、その代わり悪くなってもお前のせいではない。」と近藤（ダルク創設）に戒められたことがある。

平安の祈り ¹

神様 私にお与え下さい
変えられないものを受け入れる落ち着きを
変えられるものを変える勇気を
そして、その2つを見分ける賢さを



【注意：わかりやすいように以前の12ステップを使っています】

プロフィール

三浦陽二（みうらようじ）
46歳
1994年沖縄ダルク開設に
オープニングスタッフとして
就任。現在、沖縄ダルク
エグゼクティブディレク
ターとして講演や病院メッ
セージ活動等行っている。

お知らせ！！

DARS

第4回薬物依存症者回復
支援セミナー開催！
2010年7月24日(土)・25日
(日)
会場：龍谷大学セミナーハウ
ス「ともいき荘」
参加費：3,000円+カンパ
主催：龍谷大学矯正・保護総
合センター

申し込み・問い合わせは
電話：075-645-2040
FAX：075-645-2632

アウェイクニングハウス 入寮者からのメッセージ

「 生かされた命 」

ノボル

書籍のご案内

拘置所のタンポポ

日本ダルク代表
近藤恒夫 著

目次

- プロローグ のりピー、ダルクへおいでよ
- 第1章 絶頂からの転落～そして再起 わが波乱の半生
- 第2章 誰が、なぜ、ヤク中になるのか
- 第3章 あまりに知られていない覚せい剤の世界
- 第4章 なぜ薬物依存者は立ち直りにくいのか
- 第5章 立ち直るためにはどうすればよいのか
- 第6章 新生した仲間たち

発売：双葉社
定価1,400円（税別）

住所、名前、電話番号をご記入の上、下記のFAXあるいはメールにてお申し込み下さい。

FAX：03-5830-1791
メール：info@apari.jp

逮捕されるまでこれまでの自分の生活を振り返ってみると、毎日がどん底でした。覚せい剤を使い続ける毎日、借金は数百万円単位で増し、男性に身体を売って日銭を稼いでいました。いざ止めようと思っても覚せい剤が身体から切れると極度のうつ状態に陥って数日間寝込んだり、自殺未遂を試みたり。

「どうせ死ぬ位なら、覚せい剤を使ってでも生き延びた方がマシだ・・・。」と正当化して覚せい剤を使ってその場を凌ぐ日々を繰り返していました。そしてある日の早朝に警察の家宅捜索が入り逮捕されたのです。

自分のセクシャリティはゲイです。きっかけは特になく、幼少期から自覚はありました。小学校の時、毎日身体にアザや傷が絶えずに学校に通っていました。親からの虐待を受け、心身共に傷つき、人と接する事が怖くて中学校を卒業するまでは友人が一人もいなかったです。虐待から逃れる為に家出を繰り返していた頃、深夜のとある公園で年配の男性に声を掛けられ、性的な悪戯や家に連れて行かれて複数の男性に身体を弄ばれました。何か悪い事をされていると思っていながらも、苦痛を与える親元よりは大人達の餌食にされる方が自分には<安住の場所>でした。毎日の苦痛から逃れられるのは、<快樂>で現実逃避する事でしか自分を保つ方法はなかったのです。

次第に性的なモラルも欠如していき、高校生位から男性相手に援助交際や売春等を始め、大学時代には男性とのセックスの日々、結果20歳を過ぎる頃にはHIVに感染していました。その時は絶望的な感情よりも「やっと死ねる・・・。」という安堵感の方が先行していたのを覚えています。

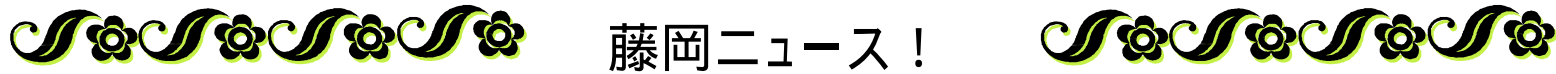
しかし、HIVはある程度の治療法が確立しているので死はなかなか訪れず、一般社会や同性愛の世界からさえも更に孤立していきました。就職をしましたが、社会不安症やパニック障害、対人恐怖症等から3カ月位しか続かず、親もうつ病への理解が乏しい中、自宅で療養する事しか出来ませんでした。自宅療養生活で精神病の理解や精神世界分野の本を読み、様々な治療（カウンセリングや民間療法）を試してみました。表向きは回復した様に感じると仕事を始めては再びうつ症状と自殺未遂を繰り返し、そして、覚せい剤を使う相手と出会ってからは、注射で覚せい剤を使用してセックスで現実逃避と快樂に溺れていきました。その後もインターネットで売人を探して、自分で覚せい剤を注射して使える様になると、回数はあっという間に増えて、もうダルクに繋がるまでもなく「生きて行くことがどうにもならなくなっていた」のです。

覚せい剤で逮捕されても初犯でダルクに入寮する人は珍しいとアパリの方やダルクの職員から話をよく耳にしますが、本当は裁判の判決で執行猶予の後は死のうと思っていました。勾留中に親身に更生を促して下さった弁護士の方や、親の熱心な対応により、アパリの方が面会に訪れ、ダルクの入寮を勧めて下さいました。

ダルクに入寮した初日、皮肉にも投げやりな気持ちから「ゲイでHIV」である事をカミングアウトしました。でも、自分の中で予測していた差別や偏見は起こりませんでした。ダルクの中で自分の心境が変わりつつあるのを感じています。「ありのままの自分」でもいいと仲間の中で支え合っていく事で自分を偽ったり隠したりせずに勇気を出してミーティングでも積極的に声をあげる事が出来ています。

周囲に黙殺されるのでは？という根拠のない不安感や恐怖感から解放された今は、苦しい事もありますが、無理をせず少しずつですが自分と向き合って生活しています。

もうすぐ誕生日を迎えますが、今は仲間と環境に恵まれながら、自分の中に再び芽生えた「生かされた命」が誰かを生かす原動力や善意となって還元できるようにこれからも回復を続けて行きたいと思います。



楽器の献品ありがとうございました！



- ピアノ
- バイオリン
- エレキギター
- アルトサクソ
- トランペット
- トロンボーン
- ドラム
- キーボード
- アンプ

こんにちは、日本ダルク アウェイクニングハウスの山本です。
 そろそろ梅雨明けも迎え、山の上もようやく蒸し暑くなってきました。
 さて、この度皆様からたくさんの楽器の提供をして頂きありがとうございました。皆様の温かいお心遣いに、一同深く感謝しております。今年中にいただいた楽器を使って、新しいプログラムを始めようと計画を立てています。そして、いつか皆様の前で演奏出来たらなぁと妄想中です。何分形にするまでは相当な時間がかかると思いますが、仲間たちと力を合わせて取り組んでいきたいと思っております。本当にありがとうございました！

< 献金をいただいた方 >

弁護士高木南様、小原司郎様、山本出様、吉本健二様、高野茂様、高野敬子様
匿名の皆様 順不同

< 楽器の献品をいただいた方 >

社団法人音楽制作者連盟の皆様
ビクターエンタテインメント株式会社の皆様
株式会社ソニー・ミュージックアーティスツの皆様、株式会社サウンドクルーの皆様、
安富良和様 順不同

皆様ありがとうございました！



2010年5月19日マック・ダルク対抗ソフトボール大会にて

リカバリー・パレード

「回復の祭典」

リカバリー・パレード「回復の祭典」とは…

「依存症、精神障がい、生きづらさ」から回復している当事者本人、家族、友人、関係者、一般の賛同者たちで集まり、回復を喜び祝うパレードを行い、一般の人たちに回復の姿をアピールします。

[日時]平成22年9月23日(祝木) 12:00~14:00

[場所]新宿(新宿中央公園 12:00集合)

[パレード]横断幕、のぼりなどを掲げて行進し、途中、琉球太鼓、コーラスを行います。詳細は今後準備委員会で検討していきます。

どうぞ皆さんご参加ください！

<http://recoveryparade-japan.com/>



特定非営利活動法人
アジア太平洋地域アディクション研究所

アパリ東京本部

〒110-0014
東京都台東区北上野2-2-2
電話：03-5830-1790
FAX：03-5830-1791
Email：info@apari.jp

アパリ藤岡研究センター

(運営：日本ダルク アウェイクニングハウス)
〒375-0047
群馬県藤岡市上日野2594番地
電話：0274-28-0311
FAX：0274-28-0313

【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立しようとしている本人
- 2、男性(年齢制限なし)

【入寮期間】

基本的に13ヶ月

【入寮費】

月額16万円(初回17万5千円、生活保護の方も可能)



ホームページもご覧ください
<http://www.apari.jp/npo/>

発行者：近藤恒夫
編集責任者：志立玲子
平成22年7月1日発行
定価 1部 100円

<アパリの司法サポート>

《薬物事犯で逮捕された刑事被告人に対する支援》

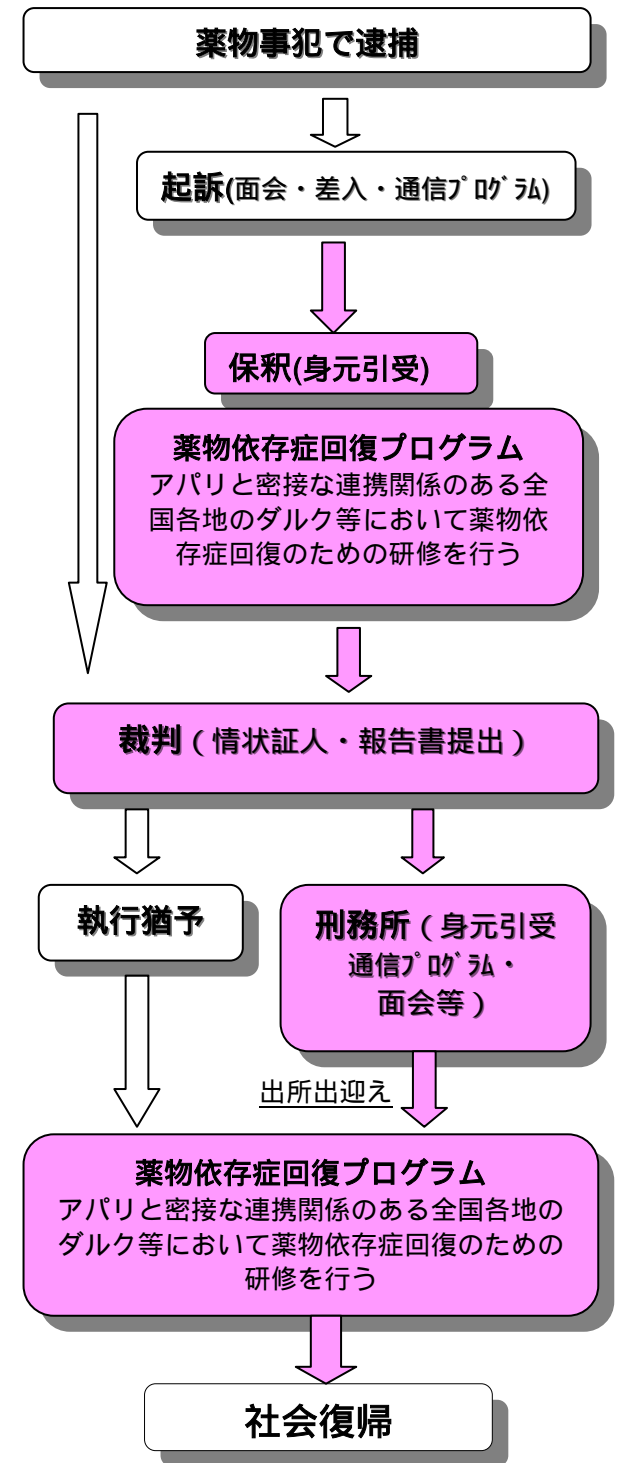
薬物犯罪で逮捕されたら刑務所に行くか、再犯防止に向けた何の取り組みもないまま執行猶予の判決をもらって、また薬物のある日常に戻るしかない日本において、**はじめて刑罰以外の再犯防止に向けた取り組みです。**

保釈中の刑事被告人に対する薬物研修プログラム、情状証人出廷、上申書作成、入寮契約、身元引受契約、出所出迎え、法律相談などあらゆるニーズにお応えします。なお、日本の覚せい剤事犯の再犯率は約60%ですが、アパリの司法サポートを利用された方の再犯率は**10%以下**です。最近では特に、**受刑中に身元引受契約をし、仮釈放又は満期釈放の時に**出迎えに行き、リハビリ施設に繋げるお手伝いをしています。

[費用：コーディネート料として一律20万円。但し、東京以外の地域は交通・宿泊費の実費が必要です]

【お問合せは東京本部まで】

アパリの支援



<アパリ・家族教室>

日時	テーマ	ファシリテーター
7月5日(月)	共依存からの回復とは?	町田 政明
7月19日(月)	思いやりと境界線	町田 政明
8月2日(月)	息子の人生、私の人生	町田 政明
8月16日(月)	共依存ってなに?	町田 政明
9月6日(月)	ウツと薬物	町田 政明

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族、知人、友人、援助職従事者

【日時】第1・第3月曜日18:30~20:30(祝日も開催します)

【場所】アパリ・クリニック上野2階 【参加費】3,000円(2名の参加は4,000円になります)

【内容】ファシリテーターと家族との分かち合いを行います。【予約】不要です

<個別相談・カウンセリング>

【対象】薬物依存症などの諸問題を抱える家族・本人など 【料金】45分 9,000円

【場所】アパリ東京本部 【カウンセラー】町田政明(元神奈川立せりがや病院勤務、ホープヒル代表、寿アルク理事) 【予約】アパリ東京本部 03-5830-1790 【注意事項】当日のキャンセルや変更の場合は全額いただきます。